

## 日本ジュニア・ユース陸上競技選手権大会 — 傷害相談窓口 —

金子晴香<sup>1,2)</sup> 鳥居俊<sup>1,3)</sup> 山澤文裕<sup>1,4)</sup>

- 1) 公益財団法人日本陸上競技連盟医事委員会      2) 順天堂大学整形外科  
3) 早稲田大学スポーツ科学学術院      4) 丸紅健康開発センター

### 1. はじめに

リオオリンピックが開催された本年、2020年に向けて医事委員会が新たに取り組む活動として日本ジュニア・ユース陸上競技選手権大会にて傷害相談窓口を開設した。この活動の背景としては2013年より行っているジュニア傷害調査の結果、ユース・ジュニア期の傷害発生の多さおよび対策不備を実感したためである。本レポートでは、ユース・ジュニア選手を対象とした傷害相談窓口の結果を報告し、ユース・ジュニア期の傷害の予防および対策の足がかりとなる情報を提供する。

### 2. 開催日時、場所

2016年10月22日と23日の2日間、第32回日本ジュニア陸上競技選手権大会、第10回日本ユース陸上競技選手権大会の開催されたパロマ瑞穂スタジアム（愛知県名古屋）にて行った。開催についてはプログラム内のトレーナーステーションの案内と併記し、トレーナーステーションと同じ場所（補助競技場内）で行った。

### 3. 窓口対応選手

2日間で17名の選手に対応した。肉ばなれが8名、疲労骨折および疲労骨折疑いが4名であった。アキレス腱障害や膝蓋大腿関節障害等の慢性障害の選手はトレーナーのケア後試合に出場した。肉ばなれや疲労骨折の選手は試合後受診しており、ほとんどすべての選手で試合前から違和感等の症状があった。症状に応じて休養期間や帰宅後の検査について指示した。無月経があり疲労骨折の可能性が高い選手および肉ばなれで病院受診のための紹介

状を希望する選手には紹介状を発行した。

### 4. 反省点・問題点

本大会で行った傷害相談ブースは初回の設置であり、相談に訪れた選手の偏りなどから考えると、設置場所やスペース、選手への周知の問題があったと考える。また、慢性障害の他に、当日発症の肉ばなれも多く、大会医務との連携も必要と考えられた。

### 5. まとめ

本ブースの設置はトレーナー活動との連携もとれ、一定の役割は果たせたと考えられる。今後はジュニアの参加大会における傷害相談ブースの設置大会を増やし、傷害の相談窓口としての役割だけでなく、傷害予防の指導・アウトリーチやアンケート等の実施も行っていきたい。この活動がジュニア世代の外傷・障害の予防および競技力向上に繋がることを期待する。

